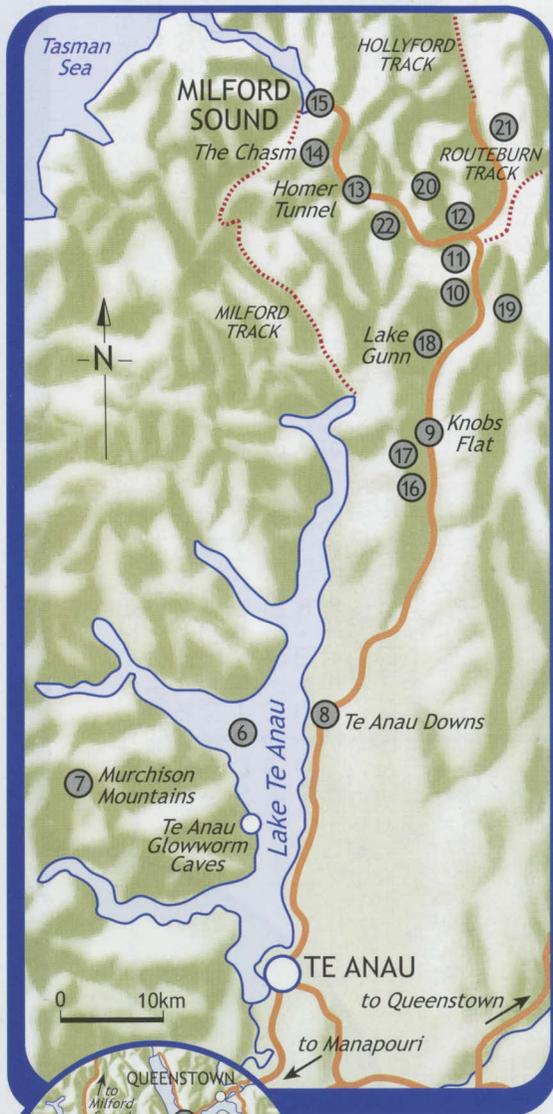


ミルフォードへのルート



クィーンズタウンから:

- ① ワカティブ湖 - 全長84km、最深400mの南島で二番目に大きい湖。
- ② リマーカブルズ山脈 - 壮観なこの山脈の最高峰は2,300mのダブル・コーン。
- ③ キングストン - 蒸気機関車キングストン・フライヤー号の発着地。ここからは、残存する氷堆石の上まで行くことができるバス・ツアーが催行されている。
- ④ ガーストン - 一番近い海から128kmも離れた、ニュージーランドで最も内陸に位置する町。
- ⑤ モスバーン - ニュージーランドにおける牧鹿業の発祥地。

テ・アナウから: km's indicate distance from Te Anau

- ⑥ テ・アナウ湖 - 面積352km²、全長61km、最深417m。3つの入り江を持つニュージーランドで二番目に大きい湖。
- ⑦ マーチソン山脈 - この国原産の珍しい鳥タカヘ (学名: ポルフィリオ・マンテリ) の生息地。
- ⑧ 29km テ・アナウ・ダウンス - 入り江にあるこのポート乗り場がミルフォード・トラックの出発点。
- ⑨ 62km ノブズ・フラット - 公衆トイレ / 電話、外国語に翻訳された展示有り。
- ⑩ 85km ザ・デバイド - 東西を結ぶサザン・アルプスで最も低い峠 (534m)。ここはルートバーン、ケイブルズ、グリーンストーンとワカティブ湖を結ぶルートの出発点でもある。
- ⑪ マリアン・コーナー - なだれ警戒令期間中は入り口の門が閉鎖となる。
- ⑫ ローアー・ホリフォード・ロード分岐点と眺望ポイント - ホリフォード谷からホリフォード・トラックの出発点に続く曲がりくねった道路。
- ⑬ 101km ホーマー・トンネル - 岩を切り開いただけの荒削りなこのトンネルは、ミルフォードに向かって10m進むごとに1m下に傾斜している。全長1,219m。二車線。
- ⑭ 109km ザ・キャズム - クレドウ川の水は、滝口から落差22mのアップー滝へと流れ出ている。危険なので、境界線を越えて滝に近づかないこと (往復15分)。
- ⑮ 120km ミルフォード・サウンド - 到着後、駐車場からビジター・センター (リアル・ジャーニーズのチェックイン・カウンター) まで徒歩10分。

個人で車を運転してミルフォード・サウンドへ来られるお客様で、時間的に余裕のある方は、以下のような場所にもお立ち寄りいただけます。

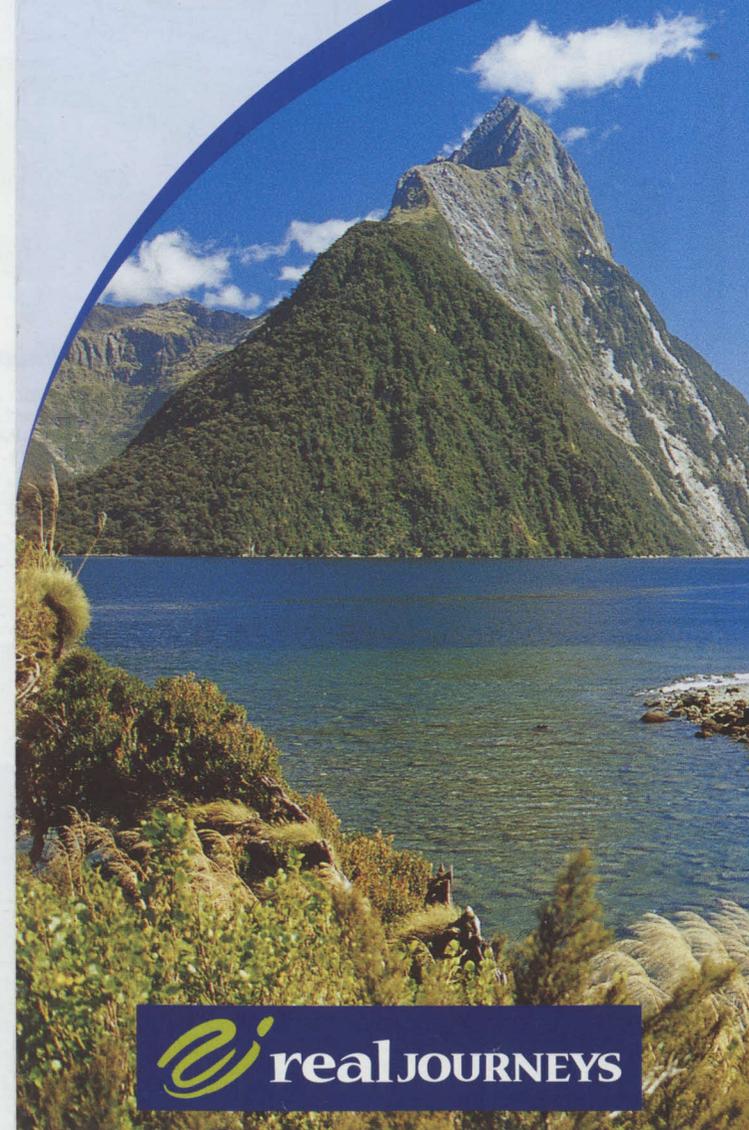
- ⑯ 58km ミラー湖群 - 山々の景色が湖面上に鏡のように映る美しさで有名な小湖群。
- ⑰ エグリントン谷 - 美しいこの谷沿いには、環境保護局指定の休憩場やキャンプ場がある。

- ⑱ 75km レイク・ガン・ネイチャー・ウォーク - プナ林からガン湖に続く環状ルート (往復30分)。ピクニック / キャンプ・エリア有。
- ⑲ キー・サミット - デバイドから始まり、ルートバーン・トラックから原生林を抜け、キー・サミットの小湖や沼地に続く散策ルート (往復3時間)。
- ⑳ レイク・マリアン - 林を抜け、美しいピクニック・エリアに続く勾配の険しいこのルートの出発点は、ローアー・ホリフォード・ロードから南へ1kmの距離にあるマリアン・コーナー (往復4時間)。
- ㉑ ガンズ・キャンプ - ここには小屋があるほか、数に限りはあるが食料品や日用品等も購入できる。開拓博物館は一見の価値有り。
- ㉒ モンキー・クリーク / リトルズ・フラット - アッパー・ホリフォードとダレン山脈の眺望が満喫できる。

個人で車を運転してミルフォード・サウンドへ行かれる場合は、テ・アナウを出発される前にガソリンを満タンにしてください (往復240km)。

Milford Sound

ビジター・インフォメーション



 realJOURNEYS

Te Anau, Lakefront Drive Queenstown, Steamer Wharf
フリーダイヤル 0800 65 65 01 フリーダイヤル 0800 65 65 03
電話 03 249 7416 電話 03 442 7500

www.realjourneys.co.nz

フィヨルドランド国立公園

フィヨルドランド国立公園は、ニュージーランドで一番大きな国立公園です。その面積125万ヘクタール(300万エーカー)はニュージーランドで二番目に大きな国立公園の2倍以上の面積に相当する広さを誇っています。

険しく起伏に富んだ地形、岩の多い海岸線、密林と急変しやすい気候条件は、この地域の道路や町の発達を妨げてきた最大の原因となっています。

フィヨルドランド国立公園は、そのユニークな特色から世界遺産として特別保護と認可を受けています。フィヨルドランドは、地球上における進化の歴史を証明するすばらしい自然とその類いまれな美しさが認められ、1986年に世界遺産地域に指定されました。

その後、1990年には、フィヨルドランドはマウント・アスパイアリング、ウエストランド、アオラキ/マウント・クックの各国立公園との合併により、世界遺産地域-テ・ワヒポウナム/サウス・ウエスト・ニュージーランドとなりました。

ミルフォード・ロードでは、ときおりケアを見ることができます



なだれ

春と冬は雪崩が非常に発生しやすく、ときには風速毎時200kmにもおよぶ衝風をともなって、古いブナの木々を薙ぎ倒してしまうこともあります。今日では、

雪崩警戒令により、雪崩が発生しやすいミルフォード・ロードのアップー・ホリフォード・クレドゥ・ヴァレー間のモニター・チェックが入念に行われています。雪崩の発生しやすい時期には、リアン・コーナーの門が閉鎖されるほか、安全上の理由により、一部で路上停車ができなくなることもあります。

木々によるなだれも、この地域における自然現象の一つです。森林地帯の岩肌に見られる大きな痕跡は、この自然現象によるものです。ブナの木は表層土が十分でないと、根を絡ませて重みに耐えようとします。木々によるなだれは、通常、大量の降雨/降雪により、根が草木を支えきれなくなったときに生じます。これらの木々が重みに耐えきれず、土台となっていた固い岩から剥ぎとられるように落ちるとき、他の草木や根までも薙ぎ倒してしまいます。

ミルフォード・ロードと ホーマー・トンネル

ミルフォード・サウンドへの開通作業は1930年に開始され、1934年までにはデバイドまで道が切り開かれました。その後、第二次世界大戦が始まると、作業は遅れ、道路は1954年になって漸く完成したのです。1935年に開始されたホーマー・トンネルの開通作業も同様に1953年によろやく完成しています。このトンネルは翌年の1954年に公式に開通しました。

このトンネルの開通作業には、非常に多くの困難がともないました。大規模な岩の破碎作業により雪溶け水が浸水し、掘り進むにつれ水が溜まってきました。最終的には、毎時1万ガロンにもおよぶ浸水は、大型の圧縮機により下流にある発電所に送られるようになりました。

作業者たちにとって、なだれもまた、悩みの種の一つでした。頻発する周辺の山々からのなだれの解決策の一つとして、なだれ警備隊が配属されました。これは、比較的効果が見られたものの、作業中3名の犠牲者を出しています。最初の犠牲者が出た後、作業者たちを保護するために鉄筋コンクリートの杭門が建設されました。その後、なだれによってこの杭門とその付近にあった作業者たちの宿泊小屋が破壊されてしまいましたが、幸いにも犠牲者はありませんでした。



ホーマー・トンネル開通工事の様子: 1935-1953

気候の涼しい雨林地帯

ミルフォードへの道路の両側には、蔓植物、木生シダをはじめとするシダ植物や木々の生い茂った、雨林の景観が広がっています。

ここに生息する木々のうち最も多いのは、雨量の多いフィヨルドランドの気候条件に適した、マオリ語でタワイと呼ばれるブナ科のシルバー・ビーチで、随所で目にすることができます。シルバー・ビーチの若木は、樹皮が特色のある銀色がかった白色で、鋸歯状の葉は指の爪ほどの大きさです。この木は適切な条件下では、25mの高さまで成長することもあります。このほかにも、ミルフォード・ロード沿いではマウンテン・ビーチやレッド・ビーチの木も見ることができます。

また、ミルフォード・サウンドに向かう道中、土壌の肥沃ないくつかの地域では、主にリムをはじめとしたイヌマキ科の高木がところ狭しと密生しているのを見ることができます。リムは、最高で50mの高さまで成長するものもあり、樹皮は薄く、焦げ茶色で、葉はあても深くうなだれているかのように垂れ下がっています。キャズムでは、これらの品種の良い例を見ることができます。このほか、ファイブ・フィンガーズやマーブル・リーフをはじめとする広葉植物にもご注目下さい。

気候

フィヨルドランド国立公園は、世界で最も雨量の多い地域の一つで、ミルフォード・サウンドでは年間の降水量が6,000mmを上回っています。雨が激しく降ると、雨水は岩はだから滝のように流れ落ち、小川は急流になります。

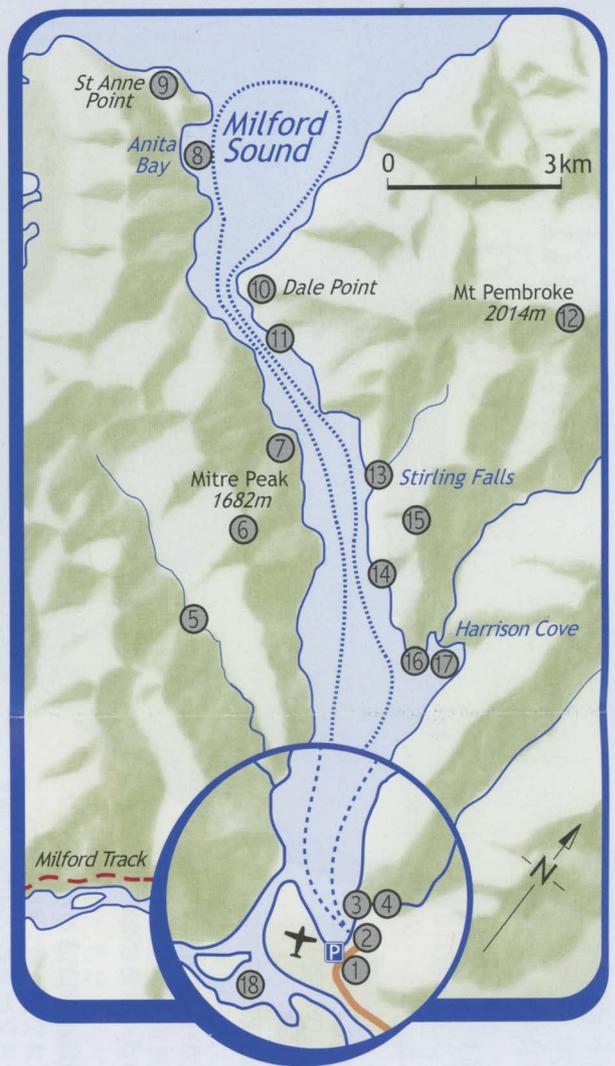
5月から8月にかけてが最も涼しく、日中気温は4~10℃程度です。太陽の位置が低くなる冬季には、陽の当たらない谷底に降りた霜が氷に変わります。11月から2月にかけてが最も暖かく、風が入りにくく日当りの良い場所は気温が25℃を上回ります。

ここは天候が急変しやすいため、季節を問わずあらゆる天候条件に対応できる服装をご用意されることをお勧めいたします。

写真提供: サウストラランド博物館

ミルフォード・サウンド

- ① **ミルフォード・ホテル** - 1878年にミルフォードに定住した最初のヨーロッパ人ドナルド・サザランドの住居跡。現在のホテルは1954年に建設されたもの。
- ② **ビジター・センターとボート乗り場** - リアル・ジャーニーズの所有する日帰りまたは泊りがけのクルーズ船の発着地(駐車場より徒歩10分)。
- ③ **セメタリー・ポイント** - ボウエン滝から落とされた岩石の碎片が古墳のように積もっていることから名付けられたこの場所は、1894年に亡くなったミルフォード・トラック開通作業の労働者ウィリアム・ラスバンが最初に葬られて以来、墓地として使用されている。
- ④ **ボウエン滝(リレ・ヒネ・テ・アワ-「小川の少女の滝」)** - ダレン連山の谷間より流れ落ちる、落差160mのこの大きな滝は徒歩で見に行くことができる。この滝は、1871年にHMSクリオ号でミルフォードを訪れた初期のニュージーランド総督ジョージ・ボウエン卿の妻エリザベス・ボウエンにちなんで名付けられた(往復20分)。
- ⑤ **シンパッド峡谷** - フィリップス山、ロウレニー・ピークとマイター・ピークに囲まれた峡谷。
- ⑥ **マイター・ピーク(ラホトゥー-男性らしさの象徴)** - 海面からそそり立つ山としては世界一高いとされている1,682mのこの山は、司教のかぶるマイター(冠)に似ていることから名付けられた。
- ⑦ **コパー・ポイント** - 岩から銅が発見されたため名付けられたこの地域は、風が渦を巻いており、しばしば100ノット(風速180km)を超える突風がある。
- ⑧ **アニタ・ベイ** - マオリの人々は、この湾一帯にあるグリーンストーン(マオリ語でタキワイと呼ばれるボーエン岩で装飾用として重宝された)を探し求めてやって来た。
- ⑨ **セント・アン・ポイント** - ここには19世紀の終わり頃に灯台が設置され、船の出入りの円滑化に貢献した。
- ⑩ **デール・ポイント** - ミルフォード・サウンドの北の入り口。この入り口を外海から確認するのはほとんど不可能であり、捕鯨船をはじめとする多くの船が長い間ミルフォード・サウンドを発見することができなかったのもこのためである。
- ⑪ **ピオピオタヒ海洋保護区** - フィヨルドの北部にある690ヘクタールの小規模な海洋保護区。
- ⑫ **ペンブローク山(マオリ語でプヒプヒ・タキワイ。グリーンストーン製のカヌーの装飾品を意味する)** - ミルフォード・サウンドで最も高い山の一つ(標高2,014m)。山中に位置するペンブローク氷河は、フィヨルドを形成した氷河の残存部分。
- ⑬ **スターリング滝** - HMSクリオ号のスターリング船長にちなんで名付けられた155mの滝。
- ⑭ **グレイシアル・ストレイション** - 海面より崖の上300mまでの高さに入った大きな横スジは、約1万4千年前に岩が氷河によって押し出されたときに形成されたもの。
- ⑮ **ザ・ライオン** - キンバリー山という正式名を持つ標高1,301mのこの山は、座っているライオンに形が似ていることから、ザ・ライオンの名で知られている。
- ⑯ **水中観測所** - 特定の時刻に催行される水中観測所ツアーは、別料金にて参加することができる(詳細はリアル・ジャーニーズのカウンターにてお問い合わせ下さい)。
- ⑰ **ハリソン入り江** - フィヨルド内で最も風雨から保護された停泊地。ペンブローク山の雪溶け水がハリソン川からフィヨルドへ流れ出ている。
- ⑱ **ディープ・ウォーター・ベイسن** - アーサー川とクレドー川の河口にあるミルフォード・トラックの終点。



岩と氷と水

フィヨルドランドは、太平洋プレートとオーストラリア・プレートの境界付近に位置しています。この二つのプレートが合流する高山断層では、オーストラリア・プレートが太平洋プレートの下に潜り込んでいます(高山断層は南島のウエスト・コーストからミルフォード・サウンドの入り口まで続いています)。この結果、太平洋プレート上の地層が隆起して形成されたのがサザン・アルプスです。

このため、フィヨルドランドは斑点のある花こう岩をはじめとする火成岩の多い、地理的に複雑な地域となっており、ホーマー・トンネル周辺の景色はその代表的なものです。ミルフォード・サウンドにある岩石は地圧によって形成された、主に片麻岩をはじめとする変成岩です。

約200万年前、地球の寒冷化により氷河期が始まりました。フィヨルドランド一帯に雪が積もり、氷となり、ミルフォード・サウンドをはじめとする谷間では、氷によって氷河が形成されました。氷河は海に向かって流れ出て行くうちに徐々に削り取られ、温暖期に入っても、ときおり寒い時期が訪れ、その結果、氷河は何度も後退と前進を繰り返し、前進するごとに谷間を深く切り刻み、入り江の両側を削り取って行きました。クルーズ船でフィヨルドを周遊されるお客様には、氷河活動によってつくられた峡谷やグレイシアル・ストレイション(岩が氷河によって押し出されたときにつくられたスジ)などをご覧いただくことができます。

ミルフォード・サウンドの地理学上の正式名は「フィヨルド」です。フィヨルドは、氷河によって浸食された狭く勾配の険しい谷に、氷河の後退によって海水が入り込んでできた入り江です。ミルフォード・サウンドの名前とは対照的に、「サウンド」とは、本来は、川沿いの谷に海拔の上昇や地盤の陥没によって海水が入り込んでできた入り江を意味するものです。

もっと詳しく 知りたい方へ

リアル・ジャーニーズ・ビジター・センターにてニュージーランドの作家ネヴィル・ピート著によるフィヨルドランドのガイドブック、「Milford Sound & Road to Milford」と「Doubtful Sound & Manapouri」をお買い求めいただけます。

マオリの歴史と伝説

ミルフォード・サウンド(マオリ語でピオピオタヒ)は、千年以上も前にマオリのイーウィ部族によって発見されたと考えられています。彼らは、主に水路交通にたよっていましたが、陸路交通に適した時期には石や亜麻などの繊維や食糧を探し求めて歩き回ることもありました。彼らが東から旅をするときには、マッキノン峠をはじめとする峠を越えるルートが代々使用されてきました。道には名前が付けられ、歌におり込まれ、歌い継がれていきました。

トゥ・テ・ラキ・ファノア: マオリの伝説によると、フィヨルドランドの海岸の「彫刻」作業はトゥ・テ・ラキ・ファノアという伝説の神人の手に委ねられたということです。彼は大声で歌(マオリ語で「カラキア」)を歌いながら、テ・ハモと呼ばれる手斧(マオリ語で「トキ」)で高くそびえる岩山を削り始めました。北に進むにつれ、彼の仕事は完成して行きました。彼は、頻繁にしけとなる荒れがちの外海の水が時おり「避難」できるように曲がりくねった長い入り江をつくりました。ミルフォード・サウンド(マオリ語でピオピオタヒ)は、彼の彫刻の中でも最高傑作とされています。残念な事に、他の仕事を任命された彼は、内陸の道を切り開く前にここを去らなければなりませんでした。

タキワイ: ミルフォード・サウンドの入り口、アナタ・ベイにある大石は、半透明の緑のポーエン岩でできています。これは、石器や装飾品として古くからマオリの人々に重宝されてきたポウナム(グリーンストーン)の特殊な形状です。マオリの伝説によると、3人の妻を失ったタマという名の酋長は海岸を探索していたとき、ピオピオタヒ(ミルフォード・サウンド)に入り、そこで石になってしまった彼の妻の一人ヒネ・ポウナムを発見したのでした。彼が悲しみ(マオリ語で「タキ」または「タンギ」)のあまりに流した涙は、石に浸透し、きらきらと光り輝く斑点となりました。このときから、この石はタキワイまたはタンギワイの名で知られるようになりました。

ピオピオタヒ: ある伝説によると、ピオピオタヒはタキワイ(グリーンストーンの一種)を採るためにミルフォード・サウンドの海岸にやって来たカヌーの名前だったということです。また他説によると、ピオピオタヒはフィヨルドランド南部の海を訪れたマウイ・ティキティキ・ア・タランガという半神がペットとして可愛がっていた鳥(おそらく、現在では絶滅したとされているこの国原産のツグミ「ピオピオ」であろう)の名前であったとも言われています。

ヨーロッパの歴史

1770年、ジェームス・クック隊長は岩の多い海岸線を探検しましたが、これ以上奥には何もないと思い込んでいたため、ミルフォード・サウンド内には入りませんでした。

ミルフォードを発見した最初のヨーロッパ人は、おそらく、1793年から海岸沿いでアザラシやオットセイの捕獲を始めた初期の開拓者の一団であったでしょう。ミルフォード・サウンドは、有名なアザラシ捕獲家ジョン・グローノ船長が、自分の生まれ故郷ウェールズのミルフォード・ヘイブンにちなんで1809年から1823年の間に名付けたと考えられています。

エリザベス号でアザラシ漁をしていた初期の捕獲家ジョン・ボルトビーは、1826年に次のようなコメントを残しています。

「出発の初日、私たちは30マイルほど離れた、アザラシ漁師たちがミルフォード・ヘイブンと呼んでいる場所にボートを運び上げ、彼らが建てた小屋で一泊した(注:ここはアナタ・ベイの西端に当たる)。」

「ミルフォード・ヘイブンは、高くそびえる山々とその間に広がる深い谷間の大自然に恵まれたロマンティックな場所に見える。森にはウッドヘン(ウエカ)、グリーン・バード(カカボ)、エミュ(キーウィ)などの狩猟鳥が豊富に生息している。これらの鳥は大きく、地面や木の穴の中に卵を産み、飛ぶことができないので、簡単に犬に捕まってしまう。」

「この左側には、二つの山脈を結ぶ奥深く狭い道があった。私たちは、ときおりものすごい暴風が吹き荒れるこの道を送気管と呼んだ。」

ヨーロッパからの移民による定住は、スコットランド人、ドナルド・サザランドによる「ミルフォード市」の設立を機に1870年代の末ごろから始まりました。

1888年のミルフォード・トラック開通後、サザランドは妻のエリザベスとともにミルフォード・トラックを旅する人々やこのすばらしい地を一目見ようと訪れる人々のために全12室の宿泊所を建設しました。

ワイルドライフ(野生動物)

ニュージーランド・ファー・シール(オットセイ)は、フィヨルドランドの随所で見ることができます。皮と油を取るために乱獲が行われ、一時は絶滅の危機に瀕していたオットセイも、現在では完全に保護されており、生息数も増加しつつあります。オットセイは泳ぐことが得意で、230mの深さまで潜ることができます。餌を食べるのは夜で、主にイカ、タコ、バラクーダ(カマス科の魚)などを食べます。昼間は、岩の上で日なたぼっこをしている姿を見ることができます。

フィヨルドランド・クレストッド・ペンギンは、世界で最も珍しいペンギンの一種で、フィヨルドに巣をつくり、やって来る10月から12月にかけて見ることができます。

ブルー・ペンギンは、体重がわずか1kgから1.5kgしかない最も小さなペンギンで、泳いでいる姿をときおり見ることができます。このペンギンは、ニュージーランドとオーストラリアでしか見ることができません。

ボトルノーズ・ドルフィン(バンドウイルカ)は、ときおりミルフォード・サウンドで見ることができます。最高で体長が3.8mまで成長するこのイルカは、魚やイカを餌とし、先の尖った短く強靱な口と顎の両方に釘のような歯を持っています。ボトルノーズ・ドルフィンのほかに、小さい群れをつくって泳ぐ多種のイルカやダスキー・ドルフィンなどを時おり見かけることができます。また、鯨もまれに見ることができます。

岩の上で日なたぼっこをするニュージーランド・オットセイ



紅茶色の水

ミルフォード・サウンドをはじめとする雨量の多いフィヨルドに入り込んだ海水には、不思議な現象が起こります。入り江に入り込んだ海水の水面には、やがて薄い紅茶色の淡水層が形成されます。山から流れてくる、海水よりも比量の軽い大量の雨水が水面に層を形成するからです。この淡水層が塩分と融合することはほとんどありません。山から流れる雨水は、川や滝を経てフィヨルドに流れ込むまでに林床のタンニンやその他の有機質によって薄茶色に変色しています。

(わずかに塩分を含む)この淡水「レンズ」(深さ2~3m)は、変色に対するフィルター役目をします。海水への光の浸透度は、淡水への浸透度と比べてはるかに低く(フィヨルド水深10mは沿岸の水深70mに相当)、暗さに慣れている海洋生物はフィヨルドでは、海よりもずっと浅いところで生息することができ、40mバンドと呼ばれる水面から40m以内の領域には、豊富な種類の珍しい海洋生物が生息しています。

ミルフォード・サウンド水中観測所(特定の時刻にツアーを催行-別料金にて参加可)では、これらの海洋生物を見学することができます。